ローマへの道

― 堀内監督の時代 ―

1957 ～ 1960

東北大学漕艇部

昭和 32 年度　主将　　青 野　洋

昭和 34 年度　主将　　島 田　恒 夫

ローマ・クルー整調　　佐 藤　哲 夫

謹　呈

感謝の心をこめて

恩師　堀内　浩太郎　様

故　御令夫人　敦子　様

平成二十四年四月吉日

編集者代表

青野　洋

はじめに

東北大学漕艇部が、昭和 35 年(1960)に開催されたローマ･オリンピック大会に日本代表として出場してから 52 年の歳月が流れました。当時を知る私たちには、あのクルーの素晴らしい艇速と輝かしい漕姿が今もって脳裏に焼きついています。その強さは世界のレベルに達しており、「メダルの有望種目」として注目されていました。

あれからの時の経過は、本学の「オリンピック大会への出場」という事象のみを残して、そこに至った経緯の風化は免れ得ないことでしょう。オリンピック大会への出場という偉業が漕艇部発展の基礎を築いただけに、どのような経緯をたどって栄冠を勝ち取ったかを記録に残し、歴史から学ぶことは極めて意義あることと思います。

「ローマは一日にして成らず」との諺の通り、この栄冠を奪取する過程は辛酸を極めたものでした。しかしどうやっても勝てないクルーが、堀内浩太郎先輩を監督に迎えてから僅か４年という短時日で、オリンピック大会への出場という大金字塔を打ち建てたのです。この短い年月において一体何が起こったのか、エネルギー爆発の連鎖反応はどのように増幅していったのかを研究することは、今日に大いに資することと思います。

北海道大学との定期戦開設 50 周年記念大会を応援してから私たちは、レンタカーを借りて雄大な北海道の原生林をドライブし、秘湯を訪ねては夜毎ボート談義に花を咲かせました。露天風呂での談義は延々と続き尽きることがありませんでしたが、「あの“ビッグバン”の全体の姿を我々は知り得ていない。我々はその一部に携わったわけだが、受けた指導をクルーはどのように表現しようと努力したか、その結果の戦績はどうであったか、その継続性をたどり、基礎を築いてくださった４年を記録に留めよう」との合意に達しました。

奇跡的とも言える短時日での偉業達成の足跡を編集することは、取りも直さず漕艇部発展の基礎形成期を記録に残すことで、そこには今日に生きる多くの遺訓を見ることができます。私たちは、あの低迷を極めた漕艇部に希望の灯火を掲げ、覇権奪取への意欲を喚起し、ボート生活の素晴らしさを教えてくださり、そしてボート界の雄へと導いてくださった堀内先輩から、筆舌には尽くせない大きな大きな「思考遺産と戦績遺産」を頂いております。

私たちが本書を編集した目的は、受けたご恩に対して僅かばかりの感謝の心を表すことにあります。同時に私たちは、今は亡き奥様にも大変お世話になりました。東京で合宿が行われると堀内先輩は私たちとともに生活され、オリンピックの年には 100 日間もの間家庭に帰らず指導してくださいました。また私たちは、よくご自宅に押しかけコンパをさせて頂きましたが、いつも大変なご歓待を受け楽しく過ごさせて頂いたことが、お優しい微笑みと穏やかなお話しぶりとともに、昨日のことのように鮮明に思い出されます。

私たちが十分な指導を受け戦績を上げえたのも、奥様の内助の功あってのことと深く感謝を致しております。この冊子は、故御令夫人のご仏前に捧げる感謝の書でもあります。

恩師 堀内浩太郎様、故敦子様、ありがとうございました。心から御礼を申し上げます。

本書の構成は、以下の通りです。

第一部　　低迷から頂点へ

各年度のクルー編制は、どのようであったか
そのクルーに対して、どのような指導が為されたか
クルーは受けた指導を、どのように表現しようとしたか
その結果、どのような戦績を残したか
次年度に、どのような課題を残したか

第二部　　歴史に学ぶ

４年間の活動を通じて、どのようなことが勝利に通ずる事象であったか

玉　章　　堀内先輩の講演録

「ボート回想 80 年」
「ブレードが水に引っ掛かる位置で艇速は決まる」

第三部　　参考資料

第一部においては、困難と闘いながら最初の年に早稲田を破り、次の年には東大に雪辱を果たし、三年目には全盛を誇った慶応に競り勝ち、そして四年目に東都のビッグフォア全てに水を開けて完勝した軌跡を描いています。このような活動を振り返ると、毎年の「積み重ねの力」というものを実感することが出来ます。

第二部の記述は、着実に力をつけていった歴年の活動から、勝利に求められる発想と行動および効果的な練習や漕法と艇速の発展可能性を把握しました。50 年前と比べて競技機材の進歩には隔世の感がありますが、艇を滑らせ勝利を掴む基本的なノウハウは、今日においても脈々と生きていると思われます。

玉章は、堀内先輩のご好意により講演録を掲載させて頂きました。ボートにかけた先輩の熱き情熱と行動から、我々後輩が範とすべき「驀進のエネルギー」を感じ取れます。
またキャッチの理論についての講演録は、水とボートと漕ぎ方の関係を科学的に丁寧に解説されており、トップを目指すクルーにとって貴重な教材になりましょう。

第三部の参考資料では、「日本サッカーの父」と謳われているデットマール・クラマーさんが選手に集中力の大切さを説き、それが「競技者魂」というスーパーエネルギーに昇華して選手もチームも飛躍的な成長を遂げる過程は、競技スポーツの原点と言えましょう。

また元二高校長・野口明先生の「真の大学の理想を目指し、漕艇部は新しい歴史の開拓者になれ」とのご高説は、堀内先輩が我々に要望された「新しい伝統を築け」とともに、「大学で何を学ぶべきか」を示唆するものとして、心に深く刻むべきことと思います。

さらに昭和 29 年、創部 2 年目にして全日本選手権大会を制覇した北海道大学のローイングは、今日にも生きる新鮮さを以って語りかけています。

歴史から学び先人から吸収して、漕艇部が再び輝きを取り戻す日を希求します。

ローマへの道

目 次

はじめに …… 3

第一部　低迷から頂点へ …… 19

歴史の夜明け
昭和 32 年度　― 目覚めた図南の鵬翼 ―
昭和 33 年度　― 異彩を放つ陸奥の新星 ―
昭和 34 年度　― 争覇ステージへの躍進 ―
昭和 35 年度　― 新しい漕法の展開と世界への挑戦

第二部　歴史に学ぶ …… 109

われらの指導者
新しい伝統を築け
勝利への原動力
最後の頼みは精神力
艇速に効果あり！
「超ロングレンジ漕法」の発展可能性

玉　章　堀内先輩の講演録 …… 133

ボート回想８０年
ブレードが引っ掛かる位置で艇速は決まる

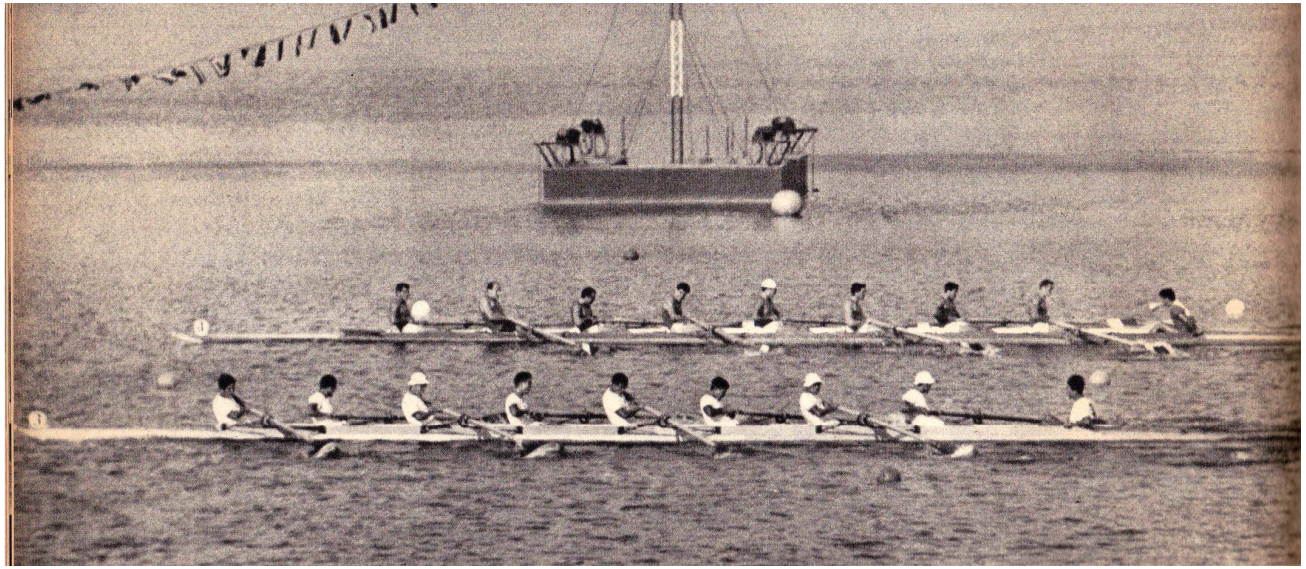
第三部　参考資料 …… 165

ローマクルー急成長の要因分析
大学クルーのスピード調査
北大 初優勝成る
大学とスポーツ
チームワークとメンバーシップ
クラマー・コーチと大和魂
オリンピック･タイムとわが国の力
全日本選手権・大学選手権大会の記録（1950～1986）

編集を終わって …… 195

ありがとうございました

決勝戦進出をかけたイタリアとの戦い



オリンピック・クルーを育てた指導陣

堀内監督

富永コーチ　　香川コーチ

日本代表クルー

“五輪の旗の下に”

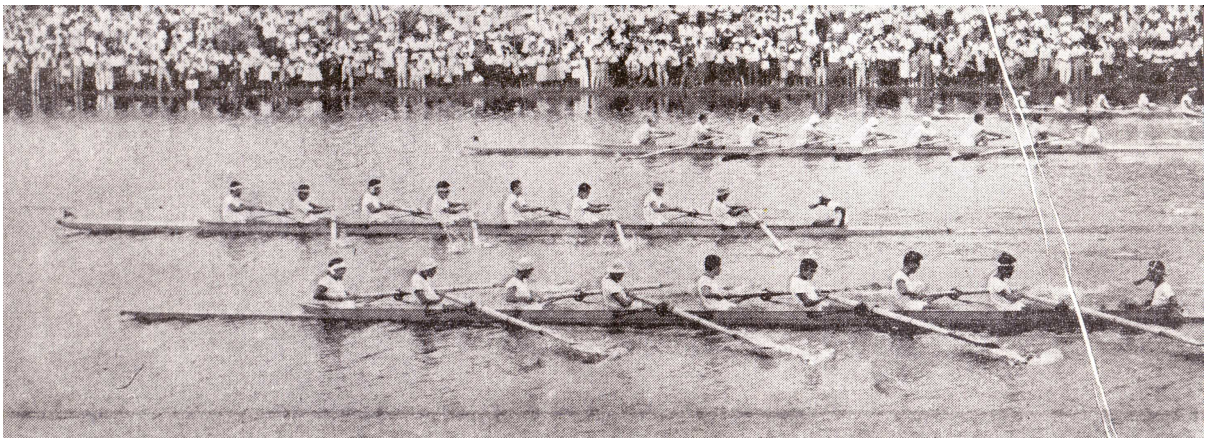
ローマ･オリンピック大会の日本代表となった東北大学クルーを

詩人サトウハチロー氏の司会により紹介した（日本教育テレビ）

堀内コーチ　指導開始（1957.2）

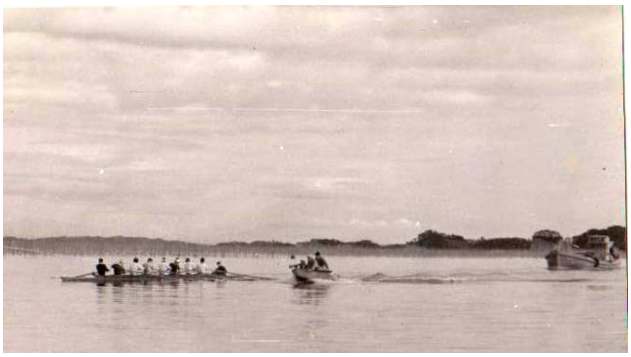
クルーを育んだ塩釜艇庫

昭和３４年 全日本選手権レガッタ



ラストスパート　エイト決勝　1800m 付近、必死に追いすがるオ大クルー(手前より 3 番目)を振り切りゴールに迫る一橋大、一番手前は東北大、一番向こうは東大

北大戦勝利の喜び（月寒牧場にて）



松島湾での力漕

閘門を開けて北上川へ